

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都多摩市鶴牧 1 - 2 6 - 3
園名	キッズサポート多摩第二めぐみクラブ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

ピタゴラ装置

<テーマの設定理由>

6月頃から、今まであまり使っていなかったピタゴラ積み木を使って遊ぶ事が増えた。最初は一人で遊ぶ姿が見られたが、段々と2、3人で一つのレーンを作って皆でどうしたらビー玉を上手く転がせるか考える姿が見られるようになった。また、積み木以外でもレンガブロックやカプラなどを使う児が増えてきていたこともあり、今後もっと発展していければと思いますテーマに設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 積み木やレンガブロックなどの量を増やし遊びを発展させる(9月～)
- ② その他の素材や玩具を組み合わせながらレーンを作って遊ぶ(11月～)
- ③ 友だちと協力して大きなピタゴラ装置を作って遊ぶ(2月～)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ① ピタゴラ積み木 / レンガブロック / ウレタン / カプラ
- ② 牛乳パック / ペットボトル / 廃材
- ③ 机 / レンガブロック / 積み木 / 楽器 / ドミノ / フープ

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ① (1)ピタゴラ装置を作って片付けずに、取っておくことの出来るコーナーを作る。今までより積み木やピタゴラ装置に特化した玩具を取り入れ、ビー玉が転がる仕組みや、コースの作り方を見本の写真を見たり、遊びながら学んでいく。
(2)見本の写真を外し、自分達で話し合いながら新しいコースを考える。
(3)レンガブロックやウレタンブロック、カプラなどを組み合わせてコースを作る。
- ② (1)牛乳パックを使ってコースを作る。牛乳パックは保育者が切って渡していたが、「自分で切りたい」という児も出てきたので、子ども達もハサミで切って、ガムテープで繋げながらレーンを作るようになる。
(2)牛乳パック以外の廃材にも興味を持ち始める。ピタゴラ装置に使用できそうな廃材を見つけると、自分で切り貼りしながら使うようになる。紙コップや箱などは、子ども達が使いやすいかったようで、使用頻度が高くなった。
(3)ピタゴラ装置の映像を視聴する。映像を見たことで、よりアイディアの幅が広がり、壁に貼り付けるだけでなく、レーンを長く広げていったり、ビー玉が螺旋階段を転がっていくような仕組みを作る児が出てくる。
(4)廃材でのピタゴラ装置作りが落ち着いてくると、レゴブロックなどを使い、板の上にレーンを作って遊ぶ児が出てくる。板を多めに準備をしたことで、個人で遊び始めたものから、少人数で遊ぶようになる。自分が作ったものと、友だちが作ったものを組み合わせて作る児が出てくる。
- ③ (1)クラス全員でピタゴラ装置を作って遊ぶ日を作る。4グループに分かれ、それぞれどんなピタゴラ装置にするか話し合いの時間を作る。全グループ共通で、ビー玉ではなく、カラーボールで行うようにした。クラス・ホールの中にあるものならすべて使用可能であることを伝えた
(2)グループごとに自由に話し合いを行いながら活動を進めていく。制限は設けずなるべく子ども達のアイディアをそのまま形に出来るようにした。
(3)各グループのピタゴラ装置が完成したので、グループごとに発表を行う。お気に入りのポイントや、他のグループには無い仕掛けなどを話し、実際に遊びながら発表を行った。
(4)他グループの発表を受け良いと思ったアイディアを自分のグループにも取り入れながら遊びを進めていく
(5)ピタゴラ装置が完成すると他グループの装置を使って自由に遊べる時間を作る。

〈活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

- ・最初にピタゴラ装置の玩具を出すと、クラスの児が興味を持ち、触ったり、見本を見ながら組み立てたりする姿が見られた。
- ・最初は保育者と一緒に組み立てたりして、仕組みがどうなっているのかを見たり、確認をして、慣れてくると「一緒に作ろう」とお友だちを誘い作る姿が見られるようになった。
- ・ピタゴラ装置の作り方の見本を壁に貼ると、それを見ながら「ここは、青色のパーツが必要だね」や「見本では、ここは高くなっているから高くしよう」など、お友だちと話す姿が見られた。少しでも装置が完成するとビー玉を転がし「先生、出来たよ」と嬉しそうに教えてくれる姿が見られた。
- ・ピタゴラの玩具以外にも、レンガブロックを使い、階段のようにする時も「一段じゃ低いから、二段にして高い階段にしよう」とお友だちと話し、「ここは、小さいブロックでいいよね」や「違うブロックを使って階段を作ろう」と試行錯誤しながら作る姿がありました。
- ・牛乳パックを出し、保育者がトンネルを作ると「先生、僕も作ってみたい」と言う児が居たので牛乳パックを渡し作る時は保育者は見守りました。ガムテープなど初めて使う物も「先生、切れないから、やってください」とお手伝いをすると、次からは自分でやってみようとする姿が見られました。

ドキュメンテーション参照

活動の様子が分かる写真 2 枚以上を貼付してください。

(HP など公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。)

5. 振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

もともとクラスにあったピタゴラ装置の玩具は6月頃まで子ども達があまり興味を示すことがなかったが、数人の児が遊び始めたことで、遊びの広がりが見えた。すくわくが始まり、ピタゴラ装置の玩具を増やしたことで、今まで遊びに参加していなかった子ども達も興味を示すようになった。始めは遊び方が難しかったようで、保育者が一緒に遊ぶことでピタゴラ装置を作ることができていたが、見本を貼るようになったことで、保育者がいなくても子ども達だけで作ることが出来るようになった。その頃から、遊びの中での子ども達同士の会話が增えるようになり、「できない」と言っていた児も、「こうしたら出来るかな?」「今度はこうしてみよう」と自分で考えるようになった。友だち同士で考えてアイディアを共有する姿も増えたので、良いきっかけとなった。②の廃材などを使ってピタゴラ装置を作り始めた頃から、廃材遊びに興味がある児が参加するようになった。ハサミを使って自由に切ったり繋げたりする作業が楽しかったようで、集中して取り組む姿が見られた。その中でも、友だち同士で繋げる作業を手伝ってあげたり、「ビー玉がジャンプする為にはどうしたらいい?」「ゴールに真っ直ぐ入るにはどうすれば良い?」と玩具だけで遊んでいた時とは違う課題が見つかり、試行錯誤する時間が増えた。アイディアが行き詰まり、遊びに発展をもたせなくなってきた頃に、写真や映像などで、ピタゴラ装置を実際に作っているものを見ることにした。その映像から新しくアイディアを吸収したり、「こんなこともできるんだ」「こんなものも使えるんだ」という気づきにも繋がるきっかけとなった。それ以降は日々大きくなっていくピタゴラ装置だったが「明日も続きをやりたい」「次はこんなことがしてみたい」と単発の遊びではなく、継続的な遊びに発展するようになった。③の活動では身近なものを使ってグループごとにピタゴラ装置を作ることをテーマに行った。ここで初めてクラス全員での活動となった。今まで参加していなかったり、普段集団ゲームなどに積極的に参加するタイプではない児も、少人数のグループ制にしたことにより、自ら考え、共有しピタゴラ装置作りをする姿が見られた。自分の思いや考えだけで、完成するものではなく、他児との共有や協力が必要となる活動ではあったが、事前に玩具や廃材などで遊んでいた過程があったことで、対象が身近なものになっても、玩具などと同じ仕組みを作り上げることができていた。また、なんでも自由に使っていいことを伝えたことで、ここで初めて“楽器”が登場した。ピタゴラ装置としてボールを転がして楽しむだけでなく、タンバリンなどを使用して、音を楽しむことにも繋がっていったので、制限なく自由に遊べるようにしたことで、より楽しみながら、ピタゴラ装置を作り上げることができたのではないかと感じた。今回の「ピタゴラ装置」というテーマは、活動の幅が狭いかもしれないと危惧していたが、実際に行ってみると、考える力、話し合う力、何度失敗しても繰り返し挑戦する力、理解する力、自分の考えを共有する力、友だちと協力する力など、様々な力が身についた良いきっかけとなった。今後も、今回のすくわくでの活動を大切に、遊びや生活の中で、自分で考えて行動し、周りと共有しながら助け合っていく力を育んでほしいと思う。